

「今年は八重比丘尼が咲いたから」

上京の理由はそれしかないというような顔をして賢吾は言った。普段は公用車しか使わない誠吾の父が自分の車を運転し、息子には言わずに自分だけを訪ねてきた意味は何かと考えだすと、もはや賢吾の周りを取り巻いて離れない不穏な色は、龍介の目にはなお一層不透明さを増して見えるばかりだった。逆に、普段と変わらず冷静な賢吾は年末に会った時とまったく同じ容貌で、それは何年にも渡り不変のまま、自然界の法則を覆すかのような若さを保っていた。きちんと食っているのか、少し痩せたんじゃないのかと龍介を気遣う様子はまるで誠吾を見ているようで、唯一の違いである目元の小さなほくろだけで、ああこの男は賢吾なのだと改めて確認するほどだった。携帯に賢吾から着信があった時、龍介は二係の連中と張り込みに行く誠吾と本庁前で別れた直後だった。「時間があるなら、顔だけ見て帰りたい」という賢吾の声は晴れ晴れとしていて、久しぶりに聞いた《おとうさんらしい》声に安心したものの、胸の奥に持つ水源は僅かに澱み、得体の知れない予兆に、底流は微妙に速度を増した。

上京してからも山梨の実家へは年に何度か足を運んではいたが、誠吾と共に朝倉の家を訪れることはめっきり減った。二十一年前の夏以来、そうして賢吾を見たのはたったの六回を数えるのみで、しかも二人きりで会うのは、修哉の葬式以来二度目のことだった。肩を並べて歩く新宿御苑は午後十時を過ぎて人影もまばらで、日本庭園を過ぎたところで、どちらからともなく自然と脚を止めた。

満開の桜が両脇に連なる広い道は、漆黒の世界にぼつかりと浮かび上がる架空庭園のような非現実性を伴い、かつてどこかで聴いた甘美で悲痛なシェーンベルグの旋律が龍介を包み込んだ。数歩先を歩いて立ち止まった賢吾の背は、大学進学前に自分に銃弾を託して去って行った男の映像をまざまざと蘇らせ、浮き彫りにされた桜の薄桃色は山梨の空の鴉色と重なり、それはやがてツツジのような鮮やかな桃色へと変化して、最後には二藍の色合いを濃くし、再び漆黒へと戻って

行くのだった。

振り向いた賢吾へ惹かれるようにして近付いて行く自分を、龍介は遠く離れて見ているような錯覚に囚われていた。亡くなった父が俺の身体を借り、誰よりも愛した男に逢いに来たのだ、と思った。賢吾はそれを知ってか知らぬか、僅かな微笑を口元へ浮かべたまま目の前に立つ龍介を見つめていた。「お前は龍介か、修哉か」と問う声は滑らかで笑いを含み、近所で偶然出会った昔からの知り合いに「元氣か」と尋ねるくらいの何気なさだったが、瞳の奥で密かに揺れていた種火は瞬時に勢いを増し、業火となって蒼い光を放った。

賢吾の背に回した両腕にほんの少し力を籠めた。首筋に埋めた顔の下の鎖骨の感触は、誠吾のそれと同じだった。賢吾は龍介に抱かれるまま天を仰ぎ、耐え切れないというように一つ吐息を漏らすと「俺はどうかしている」と囁いた。龍介は無言のまま賢吾を抱擁し、やがて右手をその頬に沿えて、反対側の耳元にそつと唇をつけた。自分の一連の行為を龍介はなおも客観的に見つめ続けながら、心に浸透する父の存在を抗いがたく感じていた。賢吾の目から涙が一つ頬を伝って流れ、龍介の唇を濡らした。さらさらした感触と、ほんの少し塩辛い涙の味がして、同時に胸を押し潰すような愛おしさがこみ上げてきた。それは龍介の脳裡に、唐土神社に臥した父修哉の亡骸を鮮烈に映し出し、つんざくような耳鳴りを伴う急激なめまいが襲ってきた。思わず口をついて叫びそうになり、必死でそれを押し殺した。錯乱した胸郭の内側で賢吾に「行かないでくれ」と懇願する自分と、「どうか、自身を殺めることだけはするな」と、彼岸から絶叫する修哉の声が重なって反響した。賢吾は自らこの世を去るのかもしれない、と思った。どうかそれだけは思い留まって欲しいと、龍介は賢吾を渾身の力で抱きしめた。天命を絶つことは、無限の闇を意味するだけだ。命濁の罪を犯せば、夜叉鬼神に魂の浄化を妨げられるどころか、受戒の身は焰地に堕ちてその精神を焼き滅ぼし、輪廻の時を永久に失ってしまう。

「お願いだから、もう自分を責めないで欲しい」

自分の口から勝手に言葉が溢れ出た。

自分自身のものなのか、修哉のものなのか、龍介にはもう判らなかつた。

「生きて欲しい。心を解放して欲しい」

龍介の体から、賢吾は身を引き剥がすようにして離れた。呼吸は乱れ、両腕で龍介の肩を掴んだまま「どうかしているんだよ、俺は」と繰り返した。

「桜の咲いた晩、俺は修哉を見た」

龍介の背を、冷たいものが駆け下りた。

「二十一年ぶりの開花だった。何かに呼ばれるようにして、気が付いたら俺は、八重比丘尼の下にいた。あの件以来、絶対に脚を踏み入れることのなかった場所だ」

賢吾は龍介と視線を合わせようとせず、見開かれた双眸には、今は紅蓮の炎が躍っていた。黒目がちの瞳の周りに揺らめくそれは、皆既日食の際に、隠された太陽の周囲に溢れ出るプロミネンスのようだった。修哉の死後、賢吾が密かに宿し続けた理火は今では劫火となり、自身を内側から焼き尽くし始めたのだった。止める間もなく、凋落の一途を辿る絶望的な苦しみへ、賢吾はすでに踏み出してしまっていた。

「修哉は、何だか微笑んでいたよ」

賢吾の頬がふと緩んだ。

「今度こそ、逢える気がするんだ」

「行かないでくれよ！」

夜の帳に、龍介の声が低く響き渡った。

「そんなこと、父が望んでいるはずはない！」

賢吾はそこで初めて目を上げた。海の底を映すような、いつもの瞳に戻っていた。

破戒を選ぶのだ、と龍介は思った。涙がこみ上げてきて、賢吾の顔が歪んだ。

「俺は行く」

こうしてまた、別離が身を引き裂いて行くのだ。

「唯一信じるのは」

華色比丘尼が、これを見て彼を呵せば。

「俺は死して必ず、修哉に再び巡り逢うということだ」
衆生の断滅の見到、墮せんと欲する者ぞ。

庁内監禁十四日目の晩、俺は木村と共に当直だった。遠慮する龍介と佐伯を、倉沢はプジョーで自宅まで送り届けると譲らず、本庁を出てから僅か五分後、佐伯から木村へ、そのまた五分後には、龍介から俺に電話が入った。いったいどれだけ飛ばしたんだと呆れながら出ると、「管理官の過保護は異常」と、龍介の笑いを含む声が耳に飛び込んできた。

「眠れそうか」

横に木村がいるので、突っ込んだ話も出来なかった。何しろこいつは、俺の横にヤモリのようにびたりと張り付いたまま、人の会話を盗み聞きしているのだった。

「寂しいけど、まあ大丈夫」

「鍵はかけたか」

「うん」

「銃は」

「枕元に置いておくよ」

龍介は、電話の向こうでくすつと笑った。

「誠吾、声が上がってるよ。主任がそばで聞いているんでしょ」
お見通しじゃねえかと、木村がニヤニヤしながら舌打ちした。

「ああ・・・横に張り付いてる」

「ねえ、誠吾」

「ん？」

「愛してるよ。もう、むちゃくちゃ。おやすみ」

切れた携帯を持ったまま、俺は頭を抱えた。ケラケラ笑っている龍介を思い浮かべた。木村は俺を肘で突き、例によって「致したのか、まだなのか」とやる始末だった。

まったく。どいつもこいつも。

そうして結局、俺も思わず吹き出してしまうのだった。

龍介はもちろんのこと、周りの連中がそうしてさりげなく俺を気遣ってくれるのは、実を言えばありがたいことだった。雪乃の訪問を受けた次の日、俺は倉沢に車を借りて母に会いに行った。病室で「あら、誠吾じゃないの」と、びっくりしたように笑う女は、父の葬儀で見た俺の母親とは、似ても似つかない別人だった。点滴の管が身体中に刺さり、もともと細身の母からは、薄く付いていた筋肉すらもごっそりと削げ落ちて、眼窩はくぼみ、頬骨は咎って、自慢だった雪のような白い肌は、見るも無残に黄ばみがかっていた。甲府一綺麗だった母が美貌を失い、気高く咲く花を思わせた彼女がそうして生命を終えようとしていることは、俺には到底理解できそうになかった。呆然としながら自分へ近付いて来る息子を母はどう思っただろう。夫に瓜二つの俺を見ながら、何を思ったのか。数ヶ月前、理由も告げずに自書を選んだ男に、そっくりな俺を。

すっかりやつれてしまった母の手を取った途端、俺はいきなり全ての感情の制御を失った。

母は個室にいて、周りに誰もいなかったのは幸いだった。病魔は恐ろしい勢いで母の身体を蝕んでおり、点滴が漏れて一面に内出血を作った腕が痛々しかった。パイプ椅子をベッドの脇に近づけて、なだれ込むように座った後は、母の手を握り締めながら声を押し殺して泣いた。胸がよじれそうに苦しかった。背を起こしたベッドに半身を預けたまま、母はそんな俺の手を弱々しく握り返し、「それだから、あんたには教えたくなかったのよ」と言った。「誠吾は我慢して何も言わないから、爆発した時が凄いのよね」と笑い、するりと自分の手を抜いて、俺の髪をそつと撫でた。あと少しで四十になるにも関わらず、母にそうされると、無条件に子供の頃へ逆戻りしていくような気がした。

俺はベッドの脇に座り、身を乗り出して母を抱いた。俺の胸郭にすっぽり隠れてしまう母の背は、頸椎の間に指が入るほど瘦せていた。嗚咽の止まらない俺に、母は「ごめんね」と言った。「わたしはこれで救われるけれど、あんたはやっぱり辛いよね」と、そのまま沈黙した。そのうち小さく涙をすすする音が聞こえ、俺の胸から顔を上げると、「嫌ね、あんたが泣くから、わたしも泣けてくるじゃないの」と、こちらを上目遣いに睨んで微笑んだ。若い頃にはきつとその仕事で難なく父を射止めたのだろうと思われる可憐さだった。俺は何も言えず、そうして無言で涙を溢れさせるだけで、優しい言葉のひとつもかけてやる事が出来ない自分が情けなかった。たつた今母が口にした「わたしはこれで救われるけれど」という一語は目まぐるしく脳裡を駆け巡り始めたが、とてもではないが、問い詰める気にはなれなかった。身体を離して再びベッドへ背をもたせた母はわずかに首をかしげて、自分の造形物をひとしきり鑑賞するように俺を眺めた。「賢吾の若い頃にそっくりだわ」と言い、「ずいぶん綺麗に育ったものね。感謝しなさい」と言つて微笑んだ。

「母さん……」

「これでお別れにしましょう」

ようやく口を開いた俺を、母はそうして柔らかく遮った。切れ長の美しい瞳の奥に、俺は彼岸の情景を見た。涙で視界が歪んだ。

「あんたを息子に持つて、わたしは幸せだったわ。ありがとうね」

そう言うと、母は顔を俺からそむけて、目を閉じた。その頬に、一筋の涙が伝った。

俺はしばらく母の横顔を見つめた。母が言うのなら、これで最後ののだと思った。

ベッドから立ち上がる時、半身を引きちぎられる思いがした。

母は目を閉じたまま、静かに泣いていた。

その額に長い口付けをし、俺は病室を出た。

廊下を歩き出す俺の背と母のいる病室との間に、暗雲が待ち構えていたように立ち込めていくのを感じた。別離はそうして人を変え、形を変えて、無力のまま立ち尽くす俺の前から、じわじわと、確実に、愛しい者たちを奪い去って行くの

だった。

「お前は、何があったのかは言わんのだがな」と、木村は俺の前に缶コーヒーを置いた。

「顔を見れば、心の中で何かを必死に消化しようとしているのが判るつてもよ。ダテに刑事やってねえから俺も、言いたくないことは無理に言わなくてもいいぜ。犯人のクソ野郎にだって黙秘権もあるくらいだから」
ふふん、と笑った。

口の堅い龍介は、俺のプライバシーは、絶対に誰にも語らない。しつこい木村をのりくらりとかわし、飄々と微笑んでいたのだろう。

「母が癌で、年を越せないらしい」

俺があっさり言うと、木村は途端に顔を曇らせて詫びた。

「ごめん……」

「いや、いいんだ」

「そばにいてやらなくていいのか」

「もう、別れは告げてきた」

一方的に告げられた、とは言わなかった。

俺の言葉に、「……複雑なんだな」と木村は勝手に納得し、それ以上母のことは聞かなかった。俺は話題を変えた。

「で、致したか、まだなのか、という話だが……」

「え……？ あ、まあ、そうだった」と、木村は急にどぎまぎし、そのうちニヤリと笑った。これが、この男流の気の遣い方だった。

「待ってくれ。本人に了解を得るから」

携帯を鳴らすと、一ベルと半分で龍介が出た。

「声が聞きたくなくなった？」と、こいつも笑っている。

「うん。それもそうなんだけど……」

「どうしたの」

「木村に言ってもいい？」

「それともう言ってるじゃない」龍介がわははと笑い、同時に木村が吹き出した。

「あれ、そうか？ そうだな……」

「誠吾は律儀すぎるんだ。まあ、そういうところが好きなんだけど」

俺は赤面しながら龍介に訊いた。「何してた？」

「パジャマに着替えてた。上半身裸」

「これ以上俺を困らせるなよ……」

「寒いからもう着るよ。想像してね。おやすみ」

またしても切れた携帯を持って、俺は頭を抱えた。

「やるな、二階堂も」と木村はひとしきりゲラゲラ笑ったあと、俺を見た。笑いすぎて目じりに涙が浮かんでいた。

「ようやく結ばれたかお前たちも。俺は安心したよ」

「安心って……」

「そうならなきや、おかしいと思っただけだ」

木村は、あーよかったと言いながら両手を頭の後ろへ組んで、椅子にもたれた。開けっ放しにした当直室のドアの向こうから、「俺はもう帰るぞ」という遠山の声が聞こえ、「お疲れ様です」と、俺たちは同時に応えた。

俺は缶コーヒーを開けて、一口啜った。無糖の苦味が口に心地よかった。

木村は、奇妙に穏やかな顔をして微笑んでいた。整った横顔にスタンドの淡い光を受けながら、「何が気掛かりかって、お前たちのことだけだったからな。これで、俺はどこかで蜂の巣にされても、もうどうでもいいや」と言った。

「何を言うんだよ突然。蜂の巣って何だよ？」

冗談ともつかない言い方の木村に、俺は思わず声を上げた。

「変なことを言わないでくれ」

「まあ、聞け」

木村は椅子の背を前にして座りなおし、背もたれの上で両腕を組んで俺を真っ直ぐに見た。そうして人を皮肉ったような表情をする木村は、いつまでも少年のような若々しさと美しい目元を湛えていたが、その瞳の奥に、ここ最近付きまとう暗雲の影を垣間見してしまうと、木村までもがという愕然とした思いが俺の胸を塞いだ。

「俺は、何かをやり残したんじゃないかとずっと考えていた。そのうちの一つは、気の合う仲間と旅行すること。これは先日の伊豆で突然実現した」

カメラを回して大はしゃぎする木村が、脳裡に浮かんた。

「もう一つは、お前たちのこと。くつついてもらわんことには、俺のほうがやきもきしてたんだからな。それから捜査のこと。これは、真鍋には話したが、俺は地雷を踏んだ」

「何だよそれ。どうしてそんな大事なことを黙っているんだお前は」

嫌な胸騒ぎが、喉元まで這い上がってきた。

「そのために、俺たちは全員監禁なのさ。お前らには申し訳ないと思っている」

「地雷ってなんだ。剣持の息子か」

「まあ、そんなところだ」と、木村は軽くかわした。

「真鍋に一任した。係長なら上に顔が利く。うまく立ち回ってくれるだろう」

「お前を尾行していたのは公安じゃないのか」

「剣持と高岡は、オトモダチだからな。俺がうっかりしてたんだ。ああいう大層な御仁は、最後のお楽しみにとっておけばよかった。ネタをひつつかまえるのに必死になりすぎたんだ」

「お前らしくない。剣持の名前には、俺が赤線を引いておいたはずだ。要注意人物は後回しにしろってあれほど……」

「はい、はい、はい」

まくしたてる俺に、木村は両手のひらを見せた。微笑んでいた。

「尾行がついたのは、その辺りからだ。まあ間違いないと見ている。あとは、向こうがどう出てくるかだ」

俺は黙って木村を見つめた。

やり残したことがあると思っっているのは、俺だけではなかったのか。

「最近、嫌な夢を見る」と、木村は目線を僅かに落とした。

「俺はそういうのはあまり気にしないタイプなんだがな。毎日同じというのは、さすがに胸クソ悪いものだわな」

「地平線が黒い雲で覆われる夢か」

呟いた俺を、木村は凝視した。

「お前もか」

「もう、ずっと前からだ」

何なのだこれは。どういうことだ。どこで、何をどう間違えたというのだ。

一体、俺たちはどこへ行くこうとしているのだ。

その晩は同報も警電も鳴らず、俺と木村は二時間交代で睡眠を食った。六時の交代のあと、俺は眠れなくなり、結局そのまま木村とポーカーをして、怠惰な時間をやり過ごした。大部屋の連中が眠そうな顔をして出て来る頃、スターバックスへ降りて朝飯を食い、国会議事堂前で、また明日など言っつて別れた。背を向ける前に木村は一瞬笑い、駅の階段を駆け下りながら、片手を上げた。

生きている木村を見たのは、それが最後だった。

当直明けは午後四時頃までうつらうつらした後、近くのスーパーへ買い物に行き食材を仕入れ、やたら張り切ってビーフシチューを作った。寝不足が続いていたせいで馬力に欠けており、九時過ぎに龍介から「十五分で着く」というメールが来た後、「今夜はビーフシチュー」と返信したら、間髪入れずに「ヒュウ」と音符付きで書いてきて、思わず笑った。拳銃二丁を食卓に放り出してシチューを食う俺たちはやはりどこかおかしく、うまいと言いながら三杯もおかわりをする龍介は、「何だかスパイになった気分」と言い、ニツと微笑んだ。「課報部員がそんなに食欲旺盛なものか」と俺が茶化すと「腹がくちくちになるとついでに眠くなる課報部員だから、あとのことはよろしく。誠吾に守られて眠るといい夢を見られるから」と、先に食い終わって龍介を眺めていた俺にウインクした。もはや日課となっていたプール通いも出来ず、「せっかく水泳に味を占めていたのに忘れるかも」と言うと「大丈夫、忘れたらまた教えてあげるから」と椅子から立ち上がり皿をシンクに入れて水道の蛇口を捻った。水の溜まる様子を見ている龍介の横顔を、点けっぱなしになっていたガス台の白熱灯が照らし、シャツの袖を捲るのを見てしまうと、俺は誘われるように立ち上がって、そのまま龍介を後ろから抱いて水を止めた。一度そういうことになった後は、俺も龍介も、ブレーキが壊れ、ハンドル操作もまるで利かない狂った車に乗った気分だった。誰も来ない地下資料室でキスを繰り返して、夜は互いの身体を離さずに、どちらもそこへ踏み出せないかかった二十三年間を、今はもう隠避する必要のない愛と情欲で埋め尽くすかの勢いだった。やるせない恍惚の表情を浮かべる龍介を、貪欲に欲し、冒し、愛撫し続ける俺の眼前には、黒々とした山稜に囲まれた青褐の湖が拡がり、煤色の空の下では、賽の河原に積まれた丸い石がひとつずつ音もなく転がって、溶解したコバルトのような滑りのある水中に次々と吸い込まれて行った。

龍介は俺の首に両腕を絡めて「愛していると言って」と囁き、その度に俺は龍介の耳元で「愛してる」と、何度でも、龍介の気の済むまで繰り返すのだった。車はやがて恐ろしいスピードで断崖を目指し、ガードレールを突き破って飛び出して行くとしても、龍介と共にいられるのならそれでもいいとさえ思った。二階堂修哉に魅せられた父が脳裡に蘇り、きつと賢吾もこうして不知夜月の晩に、導かれるようにして修哉を抱いたのだらうと思った。目前に迫り来る死によって「これでわたしは救われる」と言った母の腕を思い出した。二階堂の血に心を奪われた夫と息子を愛した母は、最期までそれ

を許すことなく逝ってしまうのだ。

今思えば、親父の死後、母の無言の拒絶は、俺自身と母にしか見えない透明な膜となつて、親子の間に慄然と立ち塞がつたのだ。龍介は賢吾の葬儀を境にもう母に会おうとはせず、「おかあさん」と呼ぶこともしなくなつた。病院の母に別れを告げられたことを話すと、遠くを見つめるような眼をして「俺は、則子さんに何と詫びたい」と言い、力なく首をうなだれるだけだつた。そんな龍介を見るにつれ、俺にまだ言っていないことがあるのではないかという釈然としなない思いは未だ胸の奥に燻り続けるのだが、龍介をそうして問い詰めるころなど、まるで想像出来なかつた。真実を知るためにそれをしなければならぬのなら、俺は知らないでいることを選ぶのだった。龍介は、俺にとつてそういう存在であり、時が来れば必ずと全てが繋がるだろうという予感もあつた。その時が永遠に来なければ来ないで、それでもいいという気持ちがあるがどこかにあり、焦りの中で龍介を抱く間、意識が一瞬逸れることもあつた。

俺を見つめる龍介の瞳は常に冷静で、法悦を共にする異常な興奮の中でも、その心はずでに別の世界から俺を求めているようにも見えた。腕の中の龍介は、違う次元の中に生きているような奇妙な感覚があるのだが、例のごとくこちらの思ひはお見通しというように、時々ふと「ここにいるよ」と微笑むのだった。俺に出来るのはせいぜい龍介を抱きしめることくらいで、「どこへも行かないでくれ」と初恋に浮かれたガキのように言い続ける自分を、もはや恥ずかしいとも思わなかつた。龍介と一体になつてしまいたいという欲望だけがどんどん先走り、中毒のように惹かれて行く自分に歯止めをかけようとしていた別の自分は、すでに心のどこかへ消えて、跡形もなくなつていた。

翌日、登庁時間を三十分過ぎて木村は大部屋に姿を現さず、普段なら俺たちよりも早く来ている木村がついに寝坊などど気楽に構えていたが、九時を過ぎたころ、我慢しきれない様子で真鍋のデスクへ駆け込む佐伯を見るや否や、自分の顔色が一変したのが判つた。

「携帯に出ない」と佐伯は呻いた。「何度鳴らしても出ない。木村の家へ行ってくる」

走り出す佐伯の背を、真鍋が追う。倉沢が立ち上がり、俺にゴルフの鍵を放つて、自分はスーツの上を羽織つた。龍介

は俺から鍵を受け取って地下へ駆け出し、倉沢に背を押されて俺は大部屋を出た。遠山は厳しい顔をして、そんな俺たちを無言で見送った。

整然と片付いた木村の家は別段荒らされた様子もなく、玄関も施錠していた。自室のベッドの中で木村は息絶えており、まったく争った様子もなく、穏やかな死に顔で仰臥していた。セントラルヒーティングのマンション内部は暖かかったが、寝室の窓は上部が斜めに開いていた。直樹はいつもそうしないと眠れないんだ、と佐伯がポツリと呟いた。「夕べは、今夜は遅くなるから、明日の朝七時に電話で起こしてくれと頼まれていた」と言い、死後硬直の進行具合を自らの手で確かめた後「もう死んでたんだな」と、遺体から顔を背けた。一見自然死のようだったが、真鍋は木村のパジャマの袖をめくり、そこに判るか判らないかくらいの注射針の痕を認めた。寝室に入った時からごく僅かにアルコール臭のような甘ったるい匂いを感じたのだが、真鍋も同じことを思ったらしかった。龍介は木村の死を確認したあとは寝室の外で他の部屋を見回していたが、「誰かが家捜ししてぐちゃぐちゃにしたあとを、必死で片付けたような印象を受ける」と言った。

確かに家は不自然なほど片付けられていて、佐伯がピンでドアを開けた瞬間に放った第一声が「ずいぶん綺麗にしてるな」という一言だったのを思い出した。倉沢は遠山に連絡した。捜査一課長も、もはや公用携帯は使わなかった。遠山の指示でヴァンが出て、数時間後には木村の死因がはっきりする。

十五分を待たず遠山自ら運転するヴァンと鑑識課の車が到着し、顔を見知った三人が密やかに姿を現した。横たわる木村を数秒見つめ合掌したあとは、感情を一切顔に出さず、仕事に取り掛かった。俺は佐伯を促し木村の家を出て、龍介はすぐに行くと言い、鑑識の連中とその場へ残った。真鍋と倉沢は何事かを話し合いながら遠山に詰め寄り、そのうち三人ともゴルフに乗って本庁へ帰って行った。

写真を撮り終わった遺体をシートに包み、遠山の持ってきた死体検案書を握り締めて法医学教室の勝又教授の元へ直接向かった。かろうじて感情の崩壊を抑えている佐伯を支える俺と龍介を交互に見たあと、検査台に横たわる冷たくなった木村を見やり、愕然として「何でまた・・・」と一言漏らした。木村の身体が解剖される間、母校を出て佐伯を根津神

社まで連れ出した。俺たちは一言も発せず、やりきれない悔しさは無言の圧力となって、肩のあたりに重くのしかかっていた。同僚を失ったといういたたまれない辛さは胸を抉り、助けられなかった己を、それぞれが同様に責め続けているのだった。鮮やかな木村の笑顔が眼前に現われては消え、歯を食いしばってはいないと涙がこぼれ落ちそうだった。木村は俺たちには言わないで密かに何かを追い続けていたのだと思い、神社に転がった女子大生のことなど、圧力がかかった時点で放り出しておけば良かったと、後悔し切れない思いが臓腑を焼いた。佐伯はついに立ち止まり、顔を覆って無言の涙を流した。龍介がその肩を抱き、俺は佐伯の手を握り締めた。木村の後を継ぎ、俺たちの手で真実を必ず暴くと誓った。彼岸で再び会うことがあれば、せめてその手柄を土産にすることが出来る。

二時間後、法医学教室へ戻った俺たちに勝又教授は「死因は肺血栓塞栓」と言った。

死亡時刻は今朝午前二時前後、微量ながら、肺に残った空気からクロロホルム反応が出たこと、肺動脈が気泡で詰まってガス交換が出来ず、その結果、換気血流不均衡が生じて、動脈血中の酸素分圧が急激に低下したために、呼吸困難を起したのだろうということだった。左腕に見られた注射針の痕は真新しく、そこから百CCもの空気を静脈注射すれば、簡単に起こる現象だとも言った。人を確実に殺す方法を知っている者の犯行であり、注射針の痕を見逃していたら、突然死と処理されても仕方ないほどの鮮やかな手口だと結び、こちらの表情を見て、申し訳なさそうに「すまん……」と付け加えた。

他殺を立証するには凶器の発見は必須であり、それはまず百パーセント不可能と思われた。酔ってもいない木村をまったく抵抗する隙も与えずクロロホルムで眠らせ、あたかも自然死のように見せかけるのは、プロの殺し屋の仕業だった。鑑識の決死の報告を待つまでもなく、指紋はどこにも残っていないだろうし、探されたものが何であるかもわからないなら、手がかりの掴みようがない。仲間を殺されて、俺たちはこのザマだ。殺人として立件出来るだけの証拠がない。上層部は敵。絶対絶命だった。

高岡慶三は感情を押し殺した前田の声を電話越しに聞いていたが、刑事部長の遠山とたった二分の差で自分に直通電話してきたことには、どこかで何かが狂い出したのだというざわめいた予感があった。新宿の捜査に関わっていた第三強行犯の警部補が殺害されたという話は高岡にとってはまさに晴天の霹靂で、自分の判断の誤りが、そうしてじわじわと取り返しのつかない方向へ動き出したことは、ようやく己の臟腑を凍らせ始めたのだった。

「どういうことなのか、説明してほしい」

現場にいたころのように硬質な前田の声は鼓膜から入り込んで、高岡の脳裡を抵抗する間もなく切り裂いた。その傷口から、封じ込めたあらゆる過去が一気に噴出した。大学時代、密かに惹かれていた前田の横顔、その思いは叶わず、前田が妻を得たこと、前田の前で気持ちをはた隠しにしたこと、絶望に駆られ、剣持に身を委ねたこと、剣持が結婚した時ですら、その関係を断ち切ることはもはや出来なくなっていたこと、前田が離婚した日の早朝のこと、そして、前田を抱きしめたこと。

俺は何をやっているのだ。

「きみは、剣持が何をしているか把握しているんじゃないのか」

「知らない」

「捜査員が殺されたんだぞ！ 知らないで済むか！」

「最近、剣持とは会っていない」

それはうそだった。現行改造内閣が特別国会にかけられるかかけられないかで、精神が不安定な剣持とは毎晩のように密会を重ねていた。総辞職によりたとえ副首相の座を失ったとしても、高岡個人の人生に於いて、剣持の握る権力は絶大だった。もはや剣持は高岡の内部に浸食しすぎていた。麻薬のようなものだった。

前田の声は、これ以上ないというくらいに憎悪を含んでいた。目の前が暗く陰った。

「きみのことは、信用していたし、尊敬もしていた。同じ警察官として頂点に登りつめていくきみを、俺は誇りに思っ
てもいた」

前田が、去っていく。

「今日限り、そのことを忘れるつもりだ。落とし前は自分でつける。俺は事件に関わる事実を全て包み隠さず遠山に話し、自分も処分を受ける」

電話は一方的に切れた。ツー、ツー、という不通音が、持ったままの受話器から調子外れに鳴り続けた。

木村死亡の一報は大部屋の捜査員たちに激しい衝撃を与え、スクープかと浮き足立った七社会の連中は無神経な記者面を下げて、次々に六階へ押し寄せて来た。遠山と真鍋は無言のまま自ら身体を張って記者たちを押しつけ、どこかのおしゃべりが漏らした木村の自宅へいち早く駆け出そうとする遊軍たちは、先回りした特殊犯と特命の刑事たちに残らず差し押さえられた。そうして逐一を私用携帯で実況する特殊犯の同僚の指示に従い、「事件性は!」「殺されたんですか!」「何か隠してるのは判ってるんですよ! いい加減に記者発表してくださいよ!」「また緘口令ですか!」という声が一階のホールに響き渡るのを尻目に、裏口から入って佐伯を非常階段へ押しやり、別館のエレベーターで公安部へ直行した俺と龍介は、開いた扉の前で待ち受ける倉沢を伴って、高岡警視監の元へ向かった。

入庁して初めて顔を拝む公安部長は顔面蒼白でこちらを凝視したまま微動だにせず、俺はまるで真夏の幽霊にでもなった気分だった。この怯えた目は何だ。何を隠している?

倉沢は僅かに目を動かしそんな高岡と俺を交互に見ていたが、前特殊犯管理官たるや、さすがに無表情だった。

「警視監。特殊犯の、朝倉誠吾と、二階堂龍介です」と言い、俺たちは下げたくもない頭を下げた。

「朝倉さん」

俺は返事をせず、目線を上げるだけに留めた。

「お父上が自害されたとのこと、ご愁傷様です」
まったく予想だにしていなかった一言が高岡の口から漏れた。つい呟いてしまったという表情だった。

「恐れ入ります」

俺は平然として、もう一度頭を下げた。上げた直後に倉沢の顔を見たが、能面だった。

父の死因は誰にも言っていない。知るのは龍介だけだ。龍介は、俺が言わないでくれと頼んだことは、たとえ拷問されたとしても、口を割るような男ではない。

龍介をちらりと見やると、こちらも表面的にはまったくの無表情だったが、その瞳には見覚えのある光が宿っていた。何かを掴んだ時のあの目だ。龍介の中で、何か繋がったのだった。俺の知らない何かだ。

龍介は俺を庇うように斜め前へ出た。すらりと伸びた白い首筋の辺りから、強烈な怒りが迸るのを見た。俺を振り向いて嫣然と微笑み、そのまま倉沢の上で一度視線を止めて、そのあと真っ直ぐに高岡を見据えた。

「警視監。遠山刑事部長からすでに連絡が入ったと思いますが、強行犯四係の木村直樹が遺体で発見されました。お心当たりは」

「心当たりというのは、どういう意味かね」

「ご自分の部下が死体で発見された、と私は申し上げております」

高岡の視線が、倉沢へ動いた。

倉沢は、相変わらず無表情のまま言った。

「新宿署管轄内での事件に関し、公安から捜査に不当な圧力をかけられていたことは、すでに部下たちには申し伝えました」

「倉沢さん」

「警視監が剣持副首相と懇意であられることも、承知しております」

「倉沢さん！」

「警視監は、ご自分が警察官であられることと、事実を隠匿することと、どちらを選ばれるのかお伺いしたい」

「前田か」

「前田孝己前刑事部長には、指示を仰ぎましたが」

そう言つて、倉沢は凄絶な笑みを浮かべた。

背筋がざわつくような倉沢の横顔を、俺は初めて目の当たりにした。

「今ここへ捜査に関わつた二人の部下をお連れしたのは、一課長である私の一存です」

ゆっくりと瞬きをした。

「優秀な部下をこれ以上減らされると、私も困りますので」

倉沢はそう言い放つたあと、茫然と立ちつくす高岡に背を向けて「行くぞ」と俺たちを促した。組織の最高幹部を前に、俺たちは敬礼もせずに、その場を後にした。

広域関東圏を中心に一年に一度の割合で行われる公安部研修は、今年は十年ぶりに山梨県警主催となった。八月も末、夏の熱気がいよいよ終盤へ向かいながら本州全土を包み込む中、中央自動車道を飛ばす高岡の胸には、警視庁公安部長として後進の指導に当たるといふ確固たる自負の他に、あの朝倉賢吾を再び見るのだというざわめくような感情がひそやかに渦巻いており、四月始めに警視庁別館の自室で対峙した山梨県警参事官の見る者を引き込むような容貌を、ぼんやりと脳裏に思い浮かべていた。世の中のすべてに興味を失って久しいといった表情の隙間から、圧倒されるようなプライドの高さと、屈折した自虐性とが見え隠れしていた横顔。長身でしなやかな体躯。長いまつげが上下するたびに、絶望の淵を彷徨う双眸。記憶の中の朝倉を思うと、知らず知らずのうちに動悸は高まり、ハンドルを握る右手には、じつとりと汗が滲んだ。あの男に、自分は再び会うのだ。その興奮は高岡の脳裏に山麓の稜線を映し出し、深く垂れ込める分厚い雲は水蒸気をたっぷり含んで、高岡を呑み込まんとするように、ゆっくりとこちらへ向かつて来るのだった。

ところが、参事官は不在のまま藤堂本部長の訓示があり、何の説明もなく四時間の研修が始まった。十県から集まった若い公安部員たちを前に、高岡はほとんど上の空で、視線はそわそわと朝倉賢吾を求めて彷徨い続けたが、大会議室に出

入りする男たちの中には、ついに朝倉の姿を見ることはなかった。その理由は、県警の手配した宿へ向かう途中、遅い夕飯がてら立ち寄った甲府市の居酒屋で藤堂から聞くこととなったのだが、淡々と語られたその内容に、高岡は一瞬自分の立場を忘れ、無様にも激しく狼狽した。

朝倉賢吾が十日前に拳銃自殺したという話は、高岡にいきなり後頭部を殴られたような衝撃を与え、蒸し返る真夏の夜にもかかわらず、手足は氷水につけたように冷たくなっていった。藤堂は、「部長は、朝倉をご存知でしたか」と言い、一瞬何かを探るような目を向けたが、高岡はかろうじて「以前、一度何かでそちらへ電話したときに、話をしたものですから」と言葉を濁した。頭の中では朝倉の容貌が目まぐるしく点滅を繰り返し、脳裡の中でもうひとりの自分が、信じられない、信じられるものかと連呼した。同時に高岡は自分が、山梨へ来れば再び朝倉に会えるのだという否定しがたい期待を抱いていたことに気がついた。俺は、もう一度あの男に会いたかったのだ。自らを含める全ての存在を排除するようなあの視線、こちらの心の奥底を射抜くような瞳、その瞳をわずかに伏せて微笑の形にした唇を、もう一度この目で見たかったのだ。

たつた今公安部長室を出て行った若い朝倉誠吾は、父賢吾に生き写しだった。賢吾と同じ瞳で自分を見つめ、つい漏らしたこちらの言葉に、腹の底から溢れ出す敵意を隠そうともしなかった。賢吾の中に見え隠れしていた炎が鬼火の燐ならば、誠吾の周りを取り巻く火焰は、壊劫の終末を思わせる紅緋だった。この父子はこんなにも似ていて、同じ道を走り抜くのだ。父を失った誠吾は誰にも言わずにたつた独りで賢吾が自害を遂げた理由を探し続け、後に自分が迎えるであろう運命に、敢然と立ち向かっているのだ。

二階堂龍介もまた、顕し方は違えど、同じように高岡へ忌避の目を向けるのだった。その瞳を見た瞬間に、龍介は過去のすべてを知っているのだと高岡は確信した。知りながらそれを誠吾に言わず、それどころか、全霊で守ろうとさえしている。高岡の耳の奥に突如大量の水の流れる音が反響した。何の音だ。修験者たちが雨乞いのために集った紀伊の清流か、雑念を拭い去るために打たれた、滝つぼに下る水筋か。清濁を一つに抱き、あらゆる煩惱の業火を鎮めんとするかのような、まるで閻伽のようなこの音は何だ。

キリストの生誕を祝う日に執り行われた木村の葬儀では、真鍋が喪主を勤めた。天涯孤独だった捜査一課の二枚目は、黒服に身を包んだ捜査員たちの物々しい警戒の中密やかに見送られ、遺骨は佐伯が抱いて帰った。俺と龍介はそのまま共に佐伯の自宅へ向かい、その晩は野郎三人で相棒の死を悼んだ。死の前日に木村が佐伯に貸したハンディカムのSDカードを抜き、伊豆旅行をパソコンで再生した。しばらく俺たちの浴衣姿が続いた後、画面は変わり、木村が全員に酌をして回る様子が映し出されると、涙で映像が曇って見えなくなった。佐伯はウイスキーを煽り、自室の一角に急遽作った祭壇の上の遺影を振り返って、「お前はずるい」と言った。

「いつだってそうして、一番最初じゃないと気が済まないんだ。何も死ぬのまで最初じゃなくなつていいだろ。それでも俺の相棒か」

三十分ほど続いた映像は華やかな木村の笑顔を最後に再生が終わつたが、フォルダには作成日時がごく最近のm2ts拡張子ファイルがひとつ残っていた。

十二月十九日午前二時三十七分、木村の死の四日前だ。

俺たちの間に、緊張が走った。

龍介がファイルをクリックし、再生が始まった。

何かにレンズが覆われているのか、画面の右三分の一ほどが暗かったが、おそらくバーのような所と思われた。薄暗いながらも濃い赤のソファが見え、しばらくすると二人の男が画面左から現れて、隣り合つて座った。目の前を黒服の男が横切り、ローテーブルの上にグラスを二つ置いたが、男のうちの一人が手で追いつくような仕草をして、黒服は男たちに一礼してすぐに画面から出て行った。さざめくような人々の話し声と、ジャズフュージョンを奏でるピアノの旋律がかすかに聴こえていたが、ドアの閉まる音と共にそれは完全に途絶えた。

「直樹のやつ・・・」と、佐伯は絶句した。

画面の中の男たちはまぎれもなく、剣持副首相と高岡警視監だった。現行内閣があわや総辞職かという時、剣持は鋭く妖艶なまなざしで高岡を見つめており、懐からむき出しの札束を取り出すと、それを高岡の胸へ押し付けながら、空いた

右手で高岡をすばやく抱き寄せた。札束を持った剣持の左手が高岡のスーツの胸元へ消え、あの公安部長が蛇に睨まれた蛙のように動けなくなっている映像を、俺たちは息もつかずに見守った。やがて空になった剣持の指が高岡の頬を軽く支え、その顔をわずかに上へ向かせた。氷を削ったような剣持の横顔は一瞬微笑を湛え、高岡に向かって何事かを囁いたが、それはポリリウムを最大にしても聞き取れなかった。高岡は真一文字に結んでいた唇を開き、剣持に何かを言おうとしたが、その口は剣持の唇によって塞がれた。

「なんてこった……」と、龍介が首を振った。

二人の権力者たちのあからさまな抱擁の映像が五分程度続いた後、剣持は突然高岡から身体を離れた。高岡は無言で剣持を見つめながら立ち上がり、踵を返して画面から消えた。残った剣持は、唇の端に微笑を浮かべながら、ローテーブルの上に残っていた飲み物を煽り、ふと視線を上げた。しばらく呆然とし、ガラス玉のような目を向けていたが、やがて明らかにカメラへ向かって焦点を結び、再度おもむろに微笑んだ。そのあと剣持も画面から出て行き、映像はそのあと数分で途切れた。

俺たちはしばらく押し黙ったまま映像の消えたパソコンの画面を凝視していたが、そのうち佐伯が耐え切れなくなったように一言漏らした。

「こんな映像を撮った代償に、直樹は殺されたってのか」

俺はため息をつくしかなかった。龍介は下を向いている。

「これをネタに、公安は脅せない……」

「剣持を脅すつもりだったのかもしれない……。直樹の目的は剣持の息子だった。前田刑事部長の息子が剣持健史と大学の同期、その前田の息子は、新宿の麻薬専門クリニックで療養中……」

「その話は、俺も今日真鍋から聞いた」と、俺は続けた。「葬儀の最中に」

「前田の息子の元彼女ってのが、新宿に転がった女子大生というの」と、龍介が結んだ。

「前田の息子は、その彼女を剣持健史に盗られたっていう、ものすごくよくある話。結局はそんな話のために、主任が

殺されたワケ？ それはただでは済まされないよ」

いきなり両手の指をポキポキ鳴らし始めた。バイクに乗る前の癖だ。

「剣持健史を重要参考人で聴取。少なくとも、薬では百パーセント黒。俺はやるよ」

「二階堂、待てよ」

「待たないよ」

身を乗り出した佐伯に、龍介は鮮やかに微笑んだ。爆発しそうな憤りが龍介の身体に充満しているのが俺には判った。

「殺られるようなヘマはしないよ。主任じゃあるまいし」

そう言うのと、切れ長の目の淵に突然涙が溢れた。龍介はそれを長い人差し指で軽く拭った。

「怒って涙が出るのは久しぶりだよ。一服して来る」と言い、龍介はコートを羽織ってベランダへ出た。

「二階堂の涙は初めて見た」と、佐伯は目を僅かに見開いた。「見慣れているから忘れていたけど、やっぱりあいつは相

当な美形だな」

「見慣れていても、毎日そう思う」

「のろけか」

「そうだ」

「ごちそうさま」あははと、佐伯が笑った。俺はちよつと微笑んだ。

「やつと笑ったな」

佐伯は、俺を見た。そして、「ありがとう」と、照れくさそうに言った。

病室へ行くと恵一はベッドにおらず、巡回に来た看護師に聞くと、リハビリセンターに在るといふ返事があつた。「和田先生が、恵一君は積み木で上手に家を作れるようになったとおっしゃっていましたよ」とにこにこ語る看護師は、まるで二歳になったばかりの子供が器用に遊ぶのを褒めているような調子で前田に言った。無論看護師に罪はなく、それは私

立大で随一の政嘉学園に在籍していながら、麻薬により自らの脳を破壊した息子が受けた天罰だった。華々しい大学生活を送り将来を囑望されていた恵一が、今は積み木と格闘し、文字もろくに書けず、文章らしい文章もまともに構築できなくなつた事實は、再び前田の心を重くした。そんなわが息子を二日おきに見舞う自分はまた、警視庁を去り自動車修理工として毎日汗水垂らし、少ない給料を切り詰めて、分不相応の私立クリニクに金を納めるのだった。別れた女房はさつさと新しい男と新しい家庭を築き、自分の腹を痛めた息子が入院していても、見舞いにも来なかつた。廊下の大きな窓からハリハビリの先生と共に積み木をしている恵一を見つめ、自分の置かれていた立場を再度振り返り、これは俺の運命なのだ、前田は改めて思った。これから自分が恵一に言おうとしていることは、そんな運命の中の、ひとつのけじめだった。事実を包み隠さず話し、それで恵一も自分も救われるのならよし、再び地獄へ墮ちるのなら、それでもいい。

前田に気づいた先生が、陽気に手を振つてきた。恵一はそんな先生を見て不思議そうな顔をし、ついで自分も前田の方を見た。父親だと認識するのに時間がかかっているようだった。やがてはにかんだ微笑を向け、僅かに首を傾げた。顔は青白く細り、首は折れそうだった。休みの度にテントを抱え、真っ黒に日焼けしながら、山岳部の仲間たちと北岳を縦走していた精悍な恵一とは、似ても似つかなかつた。

「中野慶子ちゃんを覚えているか？」

「う……ん……………」

クリニク内のカフェだった。立派に手入れされている広い中庭を眺めるテラスは、淡い冬の午後の日差しを浴びて輝いていた。隣に座る恵一は乳児のように首が据わらず、回旋性眼振が顕著に見られた。半開きの唇の端に唾液が溜まり、前田はハンカチでそれを拭いてやった。

「慶子ちゃんは、一ヶ月前に亡くなつたんだよ」

「けいこ……………しんだ……………」

恵一の身体は左右に揺れ、薄く湛えていた微笑が消えた。

「お前には言わないでおこうと思っていた。だが、劍持の息子が関わることだし、お前は慶子ちゃんのことに関して事実を知る権利がある。わかるか？」

恵一は無言だった。唾液が再び溢れ、前田はしばし黙って手を動かし続けた。

「劍持健史が、お前にしたのと同じように、慶子ちゃんをコカイン漬けにしたんだ。慶子ちゃんは中毒で亡くなり、新宿の熊野神社の前に転がった。警視庁の上層部はそれを黙認し、部下たちの捜査を、ことごとく断念させた。俺の勤めていた職場は、そんな連中が幅を利かせているところだ」

恵一の頭を支えながら、前田は無心にその口元をハンカチで拭い続けた。息子へというよりは、一語一語を自分自身に言い聞かせている気持ちだった。

「日本の副首相の息子は、何をやっても許されるのだ。お前はそんな男にたぶらかされて、今はここにいるのだよ。そしてそれを見抜けなかった俺は、父親も、刑事も失格だ」

ふいに両目に涙がこみ上げてきた。恵一の前で涙を流すわけにはいかない。

恵一は黙って父親の腕に自分の頭を預けていた。瞳はせわしなく震え、その様子からは、何を思い、考えているのかは測りかねた。

「事件を追っていた俺の部下が死体で見つかったんだ。聡明で、周囲に気配りの出来る、美しく優秀な男だった。もうたくさんだ。俺は劍持を追いつめる。たとえ潰されても、どこまでも追いつめる。お前と部下の敵だけは、必ず取る。だから恵一、負けるな。必ず元気になれ。元のお前に戻ってくれ」

そこで壮絶な涙声になり、前田は息子を抱きしめた。

腕の中の恵一は頼りなく、棒切れを抱いているような気がした。

十二月三十一日。僅かな期間のうち倉沢が二度目に訪れることとなった甲府の一角では、大晦日でありながら近所はみな総出で朝倉の家を手伝い、しんしんと雪の降り注ぐ中、門扉に燈した《忌中》の提灯のモノトーンが、別離をなおいっそう寂しく薄ら寒いものにしていた。

祭壇上の遺影の中で微笑む誠吾の母親は、輝くような新緑をバックに、男として正直心を打たれる美貌をこちらへ向けていた。少し首をかしげ、優しいな弧を描く目が印象的だった。すっきりと通った鼻筋を見て、読経の続く中、喪主として正座している誠吾の方を盗み見ると、視線を落とす部下の端正な横顔が目に入った。隣に座るのは、おそらく姉だろう。やつれた表情をしていたが、母親の美貌をそっくり受け継いだのは一目瞭然だった。姉弟は半年のうちに両親を矢継ぎ早に失うことを受け入れ、寄り添うようにして悲しみに耐えているようだった。

鴨居に掛かる真新しい遺影は、誠吾の父賢吾のものだとすぐに判った。深遠な瞳は息子のそれとまったく同じで、軽く結んだ唇の両端がかすかに微笑の形に上がり、見るものを惹きつけると同時に拒否するような美しさは、紛れもなくこの男が誠吾へ遺伝したのだと納得した。右目の横に小さな泣きぼくろがあった。真剣な顔で現場を歩き来する誠吾の様子と、賢吾の微笑が重なった。俺が密かに思い続ける部下の周りには、なぜこんなにも死が取り巻くのだらうと、倉沢はふと絶望的な気分になった。隣で祭壇を見つめている龍介をちらりと見遣った。龍介は充血した瞳を上司へ向け、一度ゆっくり瞬きをして微笑んだ。喪服の膝の上で組んでいる白い手には鮮やかに血管が浮き、繊細な長い指を見ていると、倉沢は思わず自分の大きな手を伸ばしてそれに触れた。龍介は視線を僧侶の背中へ戻し、無言のまま倉沢の手に自分の左手を重ねた。氷のように冷たい五指は倉沢の手の甲をゆっくりと這い、やがて、白蜘蛛が獲物を身体の下に取り入れて動かなくなるように、中手骨頭をすっぽり包み込んだところで動きを止めた。横で確かに息づく部下の手の平からはまったく体温を感じられず、倉沢はまたしても言い知れない断絶を味わった。こうして自分はいつも、後手後手へと回り続けるのだ。会いたいと思った人物はすでにこの世を去り、守ろうとする部下たちは、制止しようとするこちらの必死の叫びも聞かずに疾走して行くのだった。

通夜の後プロジェクトのキーを誠吾に預け、自分は代わりにゴルフで東京へ戻ることにした。音もなく振り続ける大粒の雪

は、まるで地上の全ての呪禍を覆い隠そうとしているかのように見えた。百メートルほど離れた路肩へ停めてあった公用車へ近寄る倉沢を、県警本部長の藤堂が追ってきた。乗っていかれますかと聞くと、いえ、自分はもう少し残ろうと思いません、と言ひ、「先日、わざわざお越しいただいたにも関わらず、失礼致しました」と詫言ひた。

藤堂へ傘を差し出した自分のコートの腕に降り注ぐ大きな雪の結晶が、街灯の青白い光を受けてくつきりと見えた。倉沢は無言で藤堂を見つめた。この男が通夜の間中首を項垂れ、堪え切れずに涙を流していた様子を見て、倉沢はまるで妻を失った男のようだと思ったのだ。そんな倉沢の胸の内を読んでか、藤堂は自嘲するように微笑み「若い時分は朝倉と、則子を奪ひ合つたんですよ。結局負けましたが」と言つたものだった。藤堂は、ほんの一瞬遠い昔を懐かしむような顔をして、貴方にもそんな若い時期があつたでしょうと、同意を求めめるような視線を倉沢へ向けた。則子の死に顔が倉沢の眼前に浮かんだ。棺の中の則子は枯れ木のようにやせ細つていたが、薄化粧を施された顔は、穏やかな表情を湛えていた。顔の周りを埋め尽くす白い蘭の花は一斉に倉沢の来訪を拒絶しているかのように見え、山梨に埋もれた秘事と、倉沢には一生知ることの出来ない種類の愛が、棺の中に凝縮されているような気がしたのである。

「雪にお気をつけて。誠吾たちは正月のあと、すぐに帰りますから。どうもありがとうございます。どうぞ、お元気で」藤堂は父親のような口調でそう言ひ、倉沢に一礼した後、もと来た道を行つた。

喪服の背を丸めて去つていく藤堂を見送りながら、倉沢は唐突に、この男には近いうちに、再び会うことになるだろう、と思つた。そうなる時が来るのなら、それがどうか死とは関係のないことを、切に祈るばかりだった。

通夜がひと段落した後、龍介は一度実家へ戻つた。なかなか戻ることの出来なかつた自宅はひっそりと静まり返つたまま龍介を迎え、心は一気に夏の賢吾の葬式へと逆戻りした。あれからつたの四ヶ月。再び喪服に身を包み、この地へ舞い戻ることになるとは思つてもみなかつた。美しく、優しかつた則子の顔を思い浮かべた。実の息子と同じように、自分を愛してくれた則子を。修哉に夫を奪われた則子を。この自分に、誠吾を奪われた則子を。そして、棺の中で小さく痩せ細つて死んでいた、変わり果てた則子を。

堰を切ったように涙が溢れ、食卓のテーブルに片手をつけて、呼吸を貪りながら嗚咽した。誰もいないと判っていないながらも、声を漏らさないように右手で口を覆った。自分のいったどこにこれだけの涙を溜めていたのかと思うほど、次から次へと途切れることなく流れ出した。物心がついてから今まで失ってきた愛しい者たちの顔が、順番に脳裏を掠めて行った。手を握った母が最後の呼吸を終える瞬間を思い出し、父が月影を浴びながら崩れ落ちていく様子が蘇った。新宿御苑で抱き寄せた賢吾の背の手触りを思い、六階の自販機の前で冗談を言い合いながら、くしゃつと撫でた木村の髪の毛の感触を思った。死の匂いを敏感に感じ取った倉沢が庇護本能から思わず伸ばしてきた手を包み込んだ時にも、俺は結局自分の体温を倉沢へ伝えることはできなかったのだと、龍介は号泣しながら思った。自分を撫でる母の手が、肩に添える父の手が、いつも冷たかったのと同じように、俺の手もまたそうして、不気味にひんやりしているのだ。指先で頬に触れると誠吾はいつも一瞬身震いし、そのあと狂ったように俺の身体を温めようとする。氷水の流れるこの身体はしかし永久に温まることはなく、燃え滾る命の炎ですら消してしまおうとするのだ。

拭い去れない別離への恐怖は、いったいいつまで続き、いつまで俺を苦しめるのだろうか？

何らかの形で自分は愛しい者を失う運命にあるのだと、龍介は改めて思った。じわじわと、真綿で首を絞めるように迫り来る死は、そうして周りから一人ずつ奪って行き、自分が現世において望まれない存在であることを嫌と言うほど思い知らせようとするのだった。出逢いがあれば、必ず別れがある。それならば、最初から出逢わなければよかったと思うことは間違えていると、それでも父は言うのだろうか。愛してしまっただけ、いったいどうしろと言うのだろうか。どうすれば、湖に転がり落ちていく石を止めることが出来るのだろうか？ どうしたらあの暗雲を突き破って、輝く地平線に辿り着くことが出来るのだろうか？

築地の奥まった路地に位置する料亭は、世間の目を欺き不透明な幕の後ろに隠れるようにして、今夜も変わらずひっそりと佇んでいた。それは剣持が政界へ入る前日に、前田が高岡と共に一度だけ訪れたことのある所であり、誇り高き志に

燃える若き三人が煌びやかな将来を熱く語った、思い出の場所でもあった。しかし今の前田の目には、そこはただの寂れた薄汚い路地裏にしか映らず、全ての美しい記憶は、灰色に澱んで胸の奥深くに沈んでいるだけだった。若かりし頃に戻りたいという願望は沸かず、落とした目線は自分の汚れた靴先を見つめ、オイルで汚れた手をハンカチで擦るものの、黒く汚れた指先はまるで呪いをかけられたようにくすみ、年明けの寒さに凍え、常に痺れ続けるのだった。

「待たせたか」という低い声に振り向くと、見るからに上質そうなコートに身を包んだ剣持重隆が立っていた。恵まれた容姿と柔和な人当たりで人脈戦線には苦勞しないと思われる剣持が、政界に入った途端、低姿勢に皮肉さを加え、品のよい微笑に蛇のような目線を備えたことを、前田は正直悲しいと思ったものだった。今、前田の背中を下から上へ撫でた声も、そうして学生時代の素直さを失い、緻密に計算され旧友の仮面を被った、もはや詐欺師の声に過ぎなかった。

振り向いた前田を副首相は氷のような瞳で一瞬見つめ、異様な滑らかさを伴う微笑を繰り出した。分厚い氷に真横に亀裂が入ったような口元が、妙に赤く艶かしく見えた。

どこかで見た笑い方だと思うと、すぐに公安部長室での高岡の顔が浮かんだ。権力というものはこうも人を変えてしまうものなのか。警電を握り締めて現場の捜査員と一体となり、自ら駆けずり回っていた自分は幸せだったのだと、前田は改めて嘔み締めた。

剣持の右腕が前田の肩にするりと回った。しなやかな蛇の身体が、硬直して立ち尽くす小動物を抱きすくめるのに似ていた。

「とりあえず中へ入ろう。俺は今追われている身だから、見られるとまずい」

剣持の言葉の端に、滲み出る自尊心を感じた。内閣総辞職を目前に控える今ですら、権力は絶対と妄信する声色だった。それでもどこか投げやりで自虐的だと思えるのは、剣持を古くから知る前田の、一種の願望の現れなのかもしれない。両目だけがギラギラと光を放ち前田を見据え、再び氷の微笑を見せつけた。陥落が近いことを知り、利用できるものは利用しようとしているのがあるありと見えた。生き残るためにはプライドも何もかも投げ捨てて、身体さえ売ることも厭わないだろうという、

頹廢した旧友の姿がそこにあった。

「話を聞こうか」と劍持は言い、ニヤリと微笑んだ。

前田は無表情のまま、ようやく口を開いた。

「木村を殺したのはなぜだ」

劍持は前田を見据えたまま、低く言った。

「あの捜査員は、余計なことを知りすぎた」

「警察官を殺害するというのはどういふことか、きみは判っているのだろうか」

「高岡を守るためだった」

「高岡がどう関与しているというのだ」

「スキャンダラスな映像が世間を騒がせて、公安部長の人格が疑われると困るからな」

そこで劍持は、ククツと含み笑いをした。前田の背筋がざわついた。

「きみは、俺と高岡の関係を知らないのか」

「関係？」

「高岡は、ずっときみのことが好きだった。きみはそれを知らずに高岡の親友をやっていたんだ。大学を出たところから、高岡は俺とそういう関係になった。政界に入った俺は世間体もあるし一応妻子も持ったが、性的傾向は高岡と同じだ」

口調が変わったと思うと劍持は笑いをかき消し、人を射るような自信に満ちた目は光りを失って、前田の胸元あたりを力なく見つめていた。その表情は前田に学生時代を彷彿とさせ、将来を目前に一度だけ、心にわだかまる不安を語った劍持の顔を思い出させた。

「俺は高岡を愛し、高岡はきみを愛していた。何も知らない健全なきみはさっさと結婚し、ついでに離婚した。なんとかしてきみのそばにいようとしたり高岡を、恥も外聞もなく追いかけたのはこの俺だ。きみの下で一課長をやっていた高岡を外事課へ推したのも、警視総監に媚を売って、高岡を外事課の捜査員から公安部長へ押し上げたのも、全部俺だ。いず

れ俺が首相の座に着いたら、高岡を副首相の席へ座らせる予定だった。それが、本人にとっての幸せで、俺にできる唯一のことだと思っていた」

剣持はもはや、前田の存在など目に入っていないようだった。訥々と語り続ける口調は、何かを求め、それを握りつぶし、失くしてしまおうとしているかのようだった。

「高岡に不利になることは、全て俺が先回りして隠滅してきた。警察のしがない給料で首が回らなかつた時代には、俺が一から全てを揃えてやった。接待で金がないと思えば、札束を渡した。高岡はいつも遠慮して、そんな俺を拒否しようとさえしたこともあつたが、俺が身体を求めれば応じてきた。そんな高岡の首を俺は真綿で絞め続け、俺から離れられないように、常に仕向けてきた。高岡がきみを忘れられないのを判つていながら、俺は金で、身体で、高岡を自分のものにしたんだ」

「剣持、もういい」前田は喘ぐように言った。今の前田には、剣持の告白はあまりに重すぎた。

「そんな高岡が、ついに俺から離れようとしている。捜査員が死んだ日からだ」

「きみは狂っている」

「そうかもしれない」と、剣持は吐き捨てるように言った。口元が微笑の形に吊りあがつた。

「俺と高岡が会つているところをビデオに撮られた。家捜しをさせたが、どこにもなかつた」

「木村を殺したことは、何とも思わないのか。きみの息子が結果的に中野慶子を死なせたことも、俺の息子が廃人同様になつたことも、きみは何も感じしないのか」

「息子をかわいいと思つたことは、一度もない」

剣持はそう言い切つて、前田をもう一度見つめた。

「俺の子ではない。妻がどこかの誰かと作つた子供だ」

俺は種無しだと言ひ、剣持は笑つた。

「俺に生殖機能のないことを知らない妻は、ぬけぬけと『あなたにそっくりね』と抜かした。女など、皆そんなものだ。」